

海の底

01

七月四日の海で生まれた。

幼い頃溺れて死にかけたと言っていると、それなのになぜ海が嫌いにならないのかと誰からも聞かれる。理由なんてないさ、好きなものは好きなんだと毎度答えるけれども、本当は分かっている。

そこで菊に会ったからだ。

ずっと後になってからのことだけど、菊が「人は二度生まれそうですよ」と言った。その頃菊は大学生だったと思う。菊のアパートの、四畳半の畳の上に転がって、難しい本を読む菊の横で申し訳程度に教科書を眺めていた時だった。菊はいつの間にか本から目を外して窓の向こうの闇を眺めていた。春の靄が星を滲ませるようになつた頃だった。

それまでに「人は二度死ぬ」という言い回しは聞いたことがあつたけれども、「二度生まれる」というのは初めて聞いたので首をかしげると、「昔知り合った人の言葉です」と続けた。人は、自分の愚劣さに気が付いて

空を仰いだ時、もう一度魂が誕生するのだという。なんだかよく分からなかったけど、いわゆる「出生」だけが「生まれる」ではないことはよく分かっていた。

誕生日を聞かれたら七月四日だと言うことにしている。本当の出生の日は誰も知らない。そして、その海以前のことを俺は全く覚えていない。人を作るのが記憶であるなら、俺がその日に生まれたというのはこじつけでもない。

気づいたら海の中にいた。

何せ何の記憶も記録もないから、その頃四歳くらいだということのも当時の大人の当て推量にすぎない。ともかく、もつと年長だったとしても到底足の届くような箇所ではなかった。俺は勢いをつけて深く深く沈み込んでいく最中に目を開いた。途端に孔という孔から水が飛び込んできて、息苦しさにもむせた。口を開ければそこ

にもまた水。肺が、その前に喉が求めている空気はどこにもなく、むしろがぼりがぼりと逃げていくばかりだった。闇雲に手足を振り回し、光のある方を目指した。ビニールの膜を破るような衝撃の後、突然空が現れた。爆風のように与えられた空気は、しかしゆつくり吸うことはできなかつた。直ぐにまた沈みかけ、慌てる。身体にまとわりつき自由を奪う着物を引きちぎる

勢いで手足を振り回し、何とか空気の側に居続けようともがいた。もがいて、もがいて、何度かは海に沈んで、また浮かび上がって、やはり沈んでがぼりと大量に海水を飲んで、一度力の全てを失って顔が海面に沈んだとき、俺の目は海底から浮かび上がってくる菊をとらえた。

あの頃十くらいだった計算になるだろうか、少年の身体は細く、けれども決して脆そうではなかった。白い下着だけのそのすらりとした体軀を、彼の周りの水

は、まるで空気のように支えていた。顔の見える位置まで近づいて、しかし菊はそこで止まった。

海面を泳いで近づいていたなら、そのままがみついたに違いない。俺は全くパニック状態にあつた。藁にもすがると言うけれども、実際、とにかく目に映つたものを握りしめたい、何か「確かなもの」を手の中に持ちたい、そうでなければこの膨大な水の中で自分の生存は余りにも不確かだという圧倒的な恐怖が、こんな状態に陥つた誰をも駆動する。もし菊が俺と同じくらいの子供であつたとしても、もし海面にその姿を見たのなら俺は手を伸ばしたに違いなかった。

しかし、菊は海の中にいた。何かにすがりたい気持ちと浮かび上がりたい気持ちがあつた。俺は動けなかつた。と、にこり。

菊はそこが空の中であるかのように微笑んだ。そして

て、頷いた。

一瞬のうちに菊は消えた。目を瞬かせれば、垂直降下し海底へ潜っていく菊の姿が下方に見えた。思わず追いかけてようとして、とどまる。待てと言われた。あの先は、今の俺にはついていけない世界だからだ。動きを止めた身体は、自然に浮いた。顔だけをもたげれば空気も吸えた。顔を上げていると下半身が沈みかけたから、また顔を水につけた。背中は熱く日を感じ、目は海の底を見ていた。自分は今世界の境界線にいるのだと思っただけ。

やがて菊が海底からあがってきた。棒のようなものを差し出すから、それに捕まると、もう片方を持った菊はぐんぐん泳ぎだした。やがて岸が近づいてきたかと思うと、突然その棒が強い力で引かれ、俺たち二人は空気の世界に引き上げられた。

ほっとしたように笑う菊の顔を最後に、俺の記憶は

部屋の別の隅に寝かされていた少年の姿が目に入った。

「あー！」

叫んで近寄ろうとしたが、大人に止められた。

「菊は、疲れて寝とるだけじゃけえ。寝かせちゃりい」

菊というのか、と、その名を心に刻み込んだ。あの時全能の人のように見えた菊は、こうして大人と比べて見るとすごく華奢に見えた。寝息は静かで顔も苦しそうでは無かつたけど、助けてくれたから疲れたのだとは理解できた。すぐにも飛びついてお礼を言いたいのをこらえて、その男の目を見て頷くと、やはり半分困ったような顔で、「坊はええ子じゃのう」と頭を撫でられた。それからいくつか質問をされたが、何にも答えられないでいると、分かっていた、とまた頭を撫で、「もうちつと寝え」とぼんと叩かれた。

次の記憶も場面が飛ぶ。長いこと汽車に乗っていると

また途切れている。

疲労困憊していたのだろう、その後しばらく断片的なシーンだけをうつすら覚えている。寺のようなところに寝かされていた。部屋の奥で大人達が何かぼそぼそと話していた。起き上がろうとしたらむせて、大人が慌てて近寄ってきた。背中をさすってくれたので、「ありがとう」と言うと、驚いたような、次いで困ったような顔をされた。分からなかつたのでじつと顔を見ていたら、その男は顔をゆるめて、「坊、名前は」と聞いた。首を振ると、「言えんのか」と言う。そうじゃない、分からないのだと言うと、ますます困った顔をした。気配を感じて向こうを見ると、大人達が皆困惑した顔でこちらを見ていた。戸惑いの原因は自分らしいが、とにかく何もかも——ここがどこかも、自分がだれなのかさえ分からなかつたから、仕方なく目をそらした。すると、

ところで、俺はそれに揺られているのだけどどこに行っているとも知らない。となりの誰かに連れられていることは理解している。ただ、その時俺はただ、菊から遠ざかっていることだけを考えていた。菊、とそれだけしか知らない彼の名前を何度か呼んだ。

次の場面はもう教会の中になる。

こうして俺の人生は、四歳を始点として、一九四五年から始まった。